# 「戦中派」と「戦後派」の狭間で
## ―〈疎開派〉の場合―
## Between “War Generation” and “Postwar Generation”
## ―A case of “Evacuation Generation(Sokaiha)”―

李　承俊
LEE　SEUNGJUN

摘要

This essay focuses on the “Evacuation Generation(Sokaiha)”, who insisted on generational thought by constructing war experiences as a postwar theory. The insistence of the “Evacuation Generation” was appeared as a form of contrasting with the “War Generation”. The specific movement of “Evacuation Generation” can be confirmed form the magazine, *Sokaiha*. In *Sokaiha*, they tried to set up postwar theory through their war experiences. Their criticism of postwar democracy, it can be confirmed from their essays and novels about “Postwar Generation”, Especially those related to Oe Kenzaburo, who called himself “Postwar Generation”, “Postwar Democrat”. Especially Yuri Hajime, he criticized Oe Kenzaburo, because Oe couldn’t have a war experience as a country boy. In conclusion, I examined that the “Evacuation Generation” couldn’t be generalized as a specific, unique generation insistence.

*キーワード　疎開派　世代論　戦争体験　ゆりはじめ 大江健三郎*
Keyword　Evacuation Generation(Sokaiha), Generation Theory, War Experience, Yuri Hajime, Oe Kenzaburo

### １．問題提起―〈疎開派〉という世代

戦後思想の核心は、戦争体験である。鶴見俊輔によれば、戦後というものを想定する場合、「戦争体験の意味づけによって成立する戦後」と、「戦争体験を持たないことによって成立する戦後」の二者が考えられると言っている[1]。「戦争体験の意味づけ」の対照項としての「戦争体験を持たない」戦後が成り立つのは、戦争体験とは何かが明確に画定されるからであろう。その意味で、両者とも戦争体験との関係を尺度としている点に変わりはない。

橋川文三は、戦後思想としての戦争体験論における「戦争」が、「メタ・ヒストリイク」すなわち「歴史認識」の立場からまっとうにとらえられる「戦争」でなければならないと強調している[2]。そこで戦争体験と「歴史認識」の関係において、「戦争体験論の本来めざしている歴史認識の形成」を阻害している要因の一つに、日本の「世代論」をあげている。「形式的な自己主張が反復的に主張されているにすぎない」「擬世代論」の氾濫に言及しつつ、「歴史認識のない世代論」を指摘する[3]。「世代交替という生物学的・自然主義的な事実から、直ちに歴史における現実的様式を主張しようとする」「戦後世代論」の「あやまり」[4]を論じる橋川の姿勢からすれば、「戦後世代論」こそ「擬世代論」に他ならないだろう。それは、「擬世代論」を、1960 年当時の「若い世代」「戦後世代」であった石原慎太郎や大江健三郎による世代主張から摘出して

いる点を見れば明らかである[5]。

大江健三郎の場合、自らの世代を「戦後世代」と明確に規定している。「戦後世代」は、「《戦後》にのみ」生きていくものであり、「日本人を考え、日本人を考えるとき、それは戦後の日本であり、戦後の日本についてである」。「ぼくらだけは、戦後の子であって、ぼくらの故国は《戦後の日本》のほかにはない」[6]。

このような「戦後世代」は、その上の世代である「戦中派」に対するものとして規定された。それは、自らの世代を「戦後世代と呼ぶことが常識」となっている理由に関して、「戦中派」が「ぼくらの世代の上辺を裁断して、別の世代としたからであろう」と考える大江の認識から読み取れる。「あの戦争」の時に、「戦場で」「英雄的であることのできる機会」が与えられていた「戦争のあいだ」の「日本人の若者」に対し、「現実における英雄的なもの」が欠如している「現代の日本人の若者」が対比されることで、「戦争のあいだ」の「日本人の若者」「戦中派」対「現代の日本人の若者」「戦後世代」という構図が浮上する。「戦中派」対「戦後世代」は、「戦場」での体験の有無によって「裁断」される[7]。

ここまで、戦後思想としての戦争体験論の磁場から、「戦中派」の対として規定される「戦後世代」を確認した。このような戦争体験をめぐる世代的力学を究明した先行研究に、福間良明のものがあげられる。福間は、「戦前派知識人」と「戦中派世代」との間の断絶を論じ、その力学が「戦中派世代」と「戦後派世代」との間にも同じく関与していることを究明した。「戦中派世代は、戦地に赴いた経験を持っていたのに対し、終戦時に一〇歳未満の戦後派世代は、空襲体験や疎開体験が彼らの戦争体験のすべてであったし、そうした記憶でさえおぼろげな者も少なくなかった」[8]と述べているように、「戦中派」と「戦後派」の断絶は、いかなる戦争体験を有しているのかによってもたらされたと言えよう。

戦争体験をめぐる世代的力学を解明した先行研究に、成田龍一のものも存在する。成田によれば、戦後知識人の自己批判は「過去への悔恨」の「感情」に支えられたものであるが、ここでの「過去」は戦争体験である[9]。成田は、「悔恨共同体」の「主軸」の「戦前世代」、「戦前世代」に「啓蒙」されて「悔恨共同体」に参画する「少国民世代」、両者の中間に当たりながら「悔恨共同体」に「同化」できない「戦中世代」、という三つの世代をめぐる「対立、協力、啓蒙」の様相を解析している[10]。ここでの「少国民世代」と、前述の福間における「戦後派」はほぼ等値の世代区分である[11]。成田は、戦争体験をめぐる「戦中世代」と「少国民世代」の相克を、戦後における「悔恨共同体」形成と解体のダイナミズムの中から指摘しているのである。

福間は「戦中派」と「戦後派」の断絶の有様を、成田は「戦中世代」と「少国民世代」の相克の有様を、戦争体験をめぐる戦後思想の葛藤の一断面として論じた。だが、戦争体験を確実に有している「戦中派」と比較して、戦場での戦争体験を持たず、銃後の「空襲体験や疎開体験」しか持っていない「戦後派」「少国民世代」が一枚岩的なものとして想定されている点には、補強せねばならない部分があると考えられる。例えば、娯楽週刊誌『プレイボーイ』1975 年 1 月 21・28 日号には、「新春 BIG 対談　焼跡闇市派野坂昭如 VS 疎開派菅原文太　唄と爆弾と怨念こそオレたちの“根っこ”だ！?」というタイトルの対談が掲載されている。1930 年生の野坂昭如と 1933 年生の菅原文太は、同じく「昭和ひとケタ」生まれでありながら、「焼跡闇市派」と「疎開派」という、異なる世代名が付与されているのが確認される。

『毎日グラフ』1968 年 8 月 25 日には〈疎開派〉世代に関する紹介記事が掲載された。そこで〈疎開派〉世代は、「戦後派」に属しながらも 1945 年以後生まれの「純粋戦後派」とは「どこか違ったニュアンス」を持つ世代として紹介されている。この記事に、〈疎開派〉という言葉は、ゆ

りはじめの〈疎開派〉の提唱によると記されている[12]。

〈疎開派〉の提唱には、疎開体験を戦争体験としつつ戦後思想的に意味づけることを目指して立ち上がった世代主張があった。「昭和ひとケタ」生まれで「空襲体験や疎開体験」が戦争体験として想定される「戦後派」「少国民世代」の中で、自らの体験の固有性に対するこだわりから、より細分化した世代区分を展開しようとしたと言えよう。だが、〈疎開派〉と命名され展開された世代主張を本格的に取り上げた研究は、管見の限り見当たらない。戦後思想および戦争体験論の議論からすれば、〈疎開派〉の提唱は瑣末な出来事に見えなくもない。けれども、例えば竹内好は、戦争体験論において看過されていた学童集団疎開体験の重要性を指摘し、戦争体験論の更新を「疎開体験から出発しようとしている若い世代に期待する」[13]と述べている。ここでの「若い世代」の代表格として登場したのがゆりはじめであり、彼によって〈疎開派〉が提唱されたのであれば、竹内の「期待」の行方をたどってみるのも無意味ではなかろう。

本稿では、〈疎開派〉に対する多角的な分析を行う。第一、〈疎開派〉という世代主張が定位される一断面を検討する。第二、同人誌『疎開派』の言説を具体的に検討し、特に世代論を文学の問題として考えた点に注目する。第三、〈疎開派〉世代主張の提唱者であるゆりはじめの、大江健三郎に対する批判を分析し、戦争体験として疎開体験を思想化する営みがもたらした結果を考察する。最終的に、〈疎開派〉の特徴・意義・限界をまとめ、戦後思想としての戦争体験論に、忘れられた〈疎開派〉の存在を浮上させることで一石を投じたい。

## ２．〈疎開派〉が立ち上がる―「戦中派」に異議あり

本節では、〈疎開派〉という世代主張が世に提出された事実の一断面を検討する。具体的に言えば、〈疎開派〉を提唱したゆりはじめと、それに応じた宮原昭夫の世代主張を拾い上げる。その根底に流れている、疎開体験を戦争体験とする考えが、いかなる言説を経て定着し得たかを明らかにする。

〈疎開派〉を考える上で、〈疎開派〉を提唱したゆりはじめの存在は欠かせない。

> 戦中派が自らの体験をもってプロテストの基礎とし、すでに歩みはじめているとき、われわれもまた「疎開」の体験を手がかりとして歩むために共通の項を持つ疎開派を形成することを提唱するものである[14]。

〈疎開派〉の着想は、上の世代の「戦中派」を意識するところから生まれた。「戦中派」において「自らの体験」が「基礎」となる考え方を真似するかのように、「われわれ」の「自らの体験」を「疎開」体験に求めることで〈疎開派〉の形成を提唱している。「戦中派が不毛の季節であるならば」〈疎開派〉は「不信の季節とでも云ったらよいのだろうか」[15]と言っているように、「戦中派」がこうであれば〈疎開派〉はこうである、という論理構造が見て取れる。〈疎開派〉という世代主張は、「戦中派」という対照項を軸に成り立つものである。

ゆりはじめの主張による〈疎開派〉の特性は、以下の通りである。①疎開体験を貫いている「飢餓」の感覚。②大人世代への不信と羨望の混合。③ともに飢えを経験した事実に起因する歪んだ連帯感。④高学年から低学年へ、都会から地方へ行けば行くほど拡散して薄まる世代意識。⑤少国民として抱いていた天皇・天皇制に対する強固な観念。以上の特性からゆりは、「「疎開派」とは強固な観念に襲われ、それが破砕した傷あとを、荒廃した現実に体あたりしながら、自己形成を遂げる必要があった世代」と定義している[16]。やや観念的で高踏的な定義のような

感もあるが、言い換えればこうである。生まれた時すでに戦時体制に突入していた少国民として天皇制を頂点とする軍国主義教育を信じてやまなかったのに、敗戦と共にまるで社会全体が転向したかのような戦後民主主義国家に変貌した世相を目の前にした世代。軍国主義と戦後民主主義という相容れない理念を平気で教え込もうとする教師に象徴される大人への不信感が生じ、空襲や建物疎開によって廃墟と化した戦後直後の日本で自己を形成した世代。

〈疎開派〉世代主張の一翼を担った、1972 年芥川賞受賞作家宮原昭夫は、年齢を基準に〈疎開派世代〉をより細分化し、1944 年に国民学校 6 年生だった 1932 年生まれから、1945 年に国民学校 1 年生だった 1940 年生まれまでを〈疎開派〉世代と画定している。宮原の主張による〈疎開派〉の特性は、以下の通りである。①戦前の平和の記憶の不在。②戦時体制への純粋な奉仕と敗戦による精神の崩壊。③戦後の 6・3・3 学制改革の当事者としての精神的混乱。④朝鮮戦争以後に直面した生まれてはじめての平和な日常生[17]。ゆりと宮原に共通するのは、軍国少年・少女であった自らの世代における観念的純粋性と、教育に象徴される大人世代に対する疑惑や不信感の念と、そこから派生する戦後日本への疑惑、というものであろう。特に、後者の特性は、「戦後派」戦後民主主義者の大江健三郎に対する批判に反映されていた。このことに関しては後述する。

「戦中派」を対照項とすることで成り立つ〈疎開派〉の世代主張という側面は、宮原にも共通していた。

> 「戦中派」は、大人として戦後の変化を受けとめた。戦後の各世代には戦中の記憶がなく、ものごころついた時にはもう新教育制度は整備され、世の中は安定していた。
>
> もちろん戦中派には、刻々失われて行く自由、平和、理想を見送る少年期と、軍国主義に生命をさし出して奉仕せねばならぬ青年期があり、戦後の各世代には、頭をぶつける安定した壁を前にした焦燥がある。
>
> しかし、疎開派には疎開派のドラマがある。何度信じてもその都度外界が先廻りして変わってしまい、息せききって追いかけ、追いついたと思った時にはもう外界は再び変わってしまい、という、まるでからかわれて必死に駆け廻っているような、いらだたしい、しかも受け身の少年期を持ったのが疎開派だ[18]。

宮原において「疎開派」の固有性は、「戦中派」と、「戦後」生まれの「各世代」すなわち「無戦派」(注 11 参照)との比較を通じて見出されている。「戦中派」は、自己形成を遂げた後の戦後における世の中の著しい変化を「大人として」受けとめることができた。「戦後の各世代」すなわち「無戦派」は、戦後の著しい変化を通過してすでに「安定した」世の中に落ち着くことができた。敗戦と戦後に対して、自己形成した後の大人として立ち向かうことができた「戦中派」を起点に、敗戦と戦後を自己形成する以前の子供として受け入れ、自らの生の出発点とすることができた「戦後の各世代」が想定されよう。そして、そのいずれにも与することのできない、敗戦と戦後という一変した世の中で自己形成をはからねばならなかった世代が〈疎開派〉と定位される。言い換えれば、戦争体験を有する「戦中派」に対して戦争体験を有しない「無戦派」という構図がまず定立され、その中間項として、戦争体験を有しないわけではないが「戦中派」とは異質な体験を有する〈疎開派〉世代が定位されるのである。

要するに、「戦中派」〈疎開派〉「無戦派」という世代区分の核心は、戦争体験にある。だとしたら、戦場での戦闘体験を戦争体験とする「戦中派」に対し、〈疎開派〉において疎開体験が「戦争体験」として位置づけられうるコンテキストはいかなるものなのか。上記のゆりや宮原の文章は、同人誌『疎開派』に掲載され、『思想の科学』に転載された。『思想の科学』において子

供の疎開体験を戦争体験として位置づけようとする痕跡は、1959 年 8 月の「特集　戦争体験」の記事に見られる。柴田道子における、戦争体験としての疎開体験の内実を、「お腹がすいたこと」、「先生という権威がくずれはじめた」、「既成の権威」は「信じられぬもの」で「おかしい」[19]とする内容は、ゆりや宮原の主張にも繰り返されていると言えよう。何よりも、「戦争体験」特集記事「戦争が生んだ子どもたち」という題目そのものが、疎開体験を戦争体験として位置づけている。

柴田道子は、自らの原体験を戦争体験としての疎開体験に求めていた[20]。このような思考は、銃後の戦争体験を本格的に世に問うた著作『ひき裂かれて――母の戦争体験』（筑摩書房、1959）からその発端を見つけることができよう。我が子を疎開に参加させた母の立場で綴られた「学童疎開」[21]が「母の戦争体験」として語られることで、疎開に参加させられた子の疎開体験が、戦争体験としてカテゴライズされうる道が開かれたと言える。学校による学童疎開の記録は「これは、幼い子供たちが、戦いのきびしさから、親もとを離れ、戦争のかげに、戦いぬいた集団疎開の記録である」[22]と意味づけられた。引率教員の立場で書かれた学童疎開の記録では、学童疎開は「昭和の児童受難史であった」[23]と記された。この言葉は、柴田においても繰り返さる[24]。

以上、疎開体験が戦争体験と位置づけられるようになった流れを俯瞰することで、自らの戦争体験としての疎開体験を世代主張の武器とする〈疎開派〉が浮上した事実の一断面を検討した。肝心なのは、そこではつねに「戦中派」が対照項として想定されていた事実である。本節で言及したゆり・宮原の主張は、鶴見俊輔の言う「戦争体験の意味づけによって成立する戦後」の議論に参画するための、疎開体験世代による思想的営為であった。

## 3．〈疎開派〉が走り出す①―同人誌『疎開派』

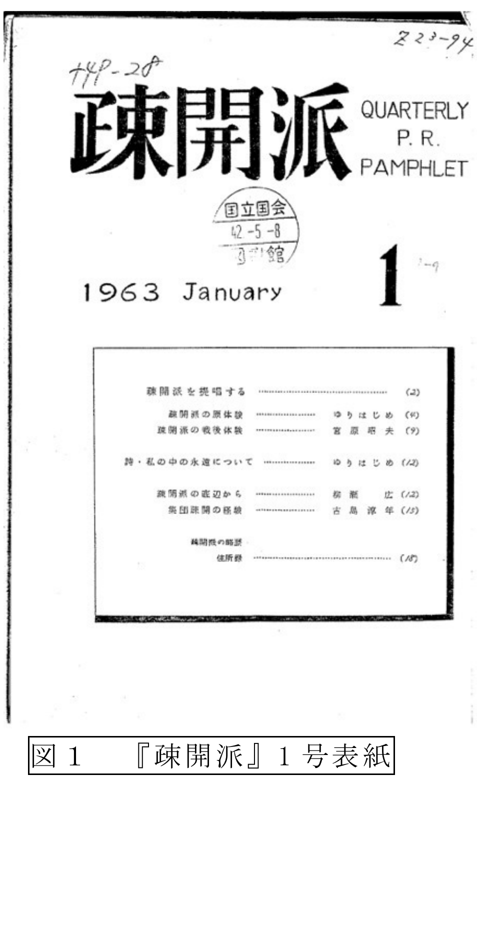


図 1　『疎開派』1 号表紙

〈疎開派〉世代による思想的営為の頂点は、同人『疎開派』の結成および活動である。本節と次節に渡って、ゆりはじめの呼びかけによって結成された同人誌『疎開派』を中心に、〈疎開派〉の世代主張の内実を検討する。本節では、『疎開派』初期の言説を取り上げ、世代論を文学の問題として考えた点に注目する。

まず、同人誌『疎開派』の書誌情報についてであるが、筆者の手元には、5 号抜きで 1～11 号がある[25]。ただし、ゆりはじめのインタビューによれば、刊行は 13 号までは持続されたようで、1996 年当時休刊とされている。それ以後の発行に関しては現在のところ不明である[26]。1 号の際にゆりや宮原を含めて 4 人の同人で出発したが原稿が集まらず、やむを得ず 1965 年 6 月解散、その後再発刊した[27]。

『疎開派』1 号巻頭には「疎開派を宣言する」というマニフェストが掲げられている。「(一)何を問題とするか」と「(二)何をめざすか」とによって構成されている。「(一)」

で特徴的なのは、「疎開派は一つの世代論である」と宣言されている点と、「過去の体験の思い出話が吾々の仕事ではない。むしろ世代としての現在のありようの欠陥の克服と、現在におけるこの世代の特徴が未来においていかなる能動的意味を果すかを究めたい」と課題を設定している部分である。疎開体験を共通項とする「世代論」の確立を目指しつつも、決して戦争体験としての疎開体験を語り合いながら過去に潜り込む「世代論」を志向しない、「現在のありようの欠陥の克服」およびそこから導かれる「未来」における「能動的意味」の究明のための「世代論」であると明言している[28]。

「(二)」で特徴的なのは、『疎開派』を「新しい文学グループ」と宣言し、「世代論がわれわれの文学を作り上げた」と言っているように、「世代論」が「文学」と結びつけられる部分である[29]。本稿でそのすべてを取り上げることはできないが、『疎開派』誌面を通じて、ゆりや宮原だけでなく様々な書き手による小説・詩や、文学評論が掲載された。

1 号には同人 4 人による世代主張が掲載されている。横浜出身という共通点はあるものの、疎開体験の内容もさることながら、体験に対する認識に差異が存在するところが目につく。まず、ゆりと宮原だが、先述した『思想の科学』に転載されたもので、内容に関しては前節で述べた通り、戦争体験としての疎開体験を積極的に打ち立てようとしている。一方で、より低学年で疎開を経験した者による「疎開派の底辺から」「集団疎開の経験」では、高学年であったゆり・宮原とは異なる認識が示されている。例えば「疎開派の底辺から」では、「飢餓」「戦争体制の中での肉体的な苦痛」「精神的なゆがみの記憶」などを持たない著者は、「直接身をぶっつけて経験したものわかりのいいしっかり者の兄貴たち疎開派といちじるしく違う」[30]と白状している。共通の疎開体験から世代論を掲げた『疎開派』内部において、すでに疎開に対する認識にズレが生じていたと言える。しかも、ゆりは縁故疎開、宮原は疎開に参加できず残留、「集団疎開の経験」著者は集団疎開であるなど、疎開体験の内容もばらばらであった。

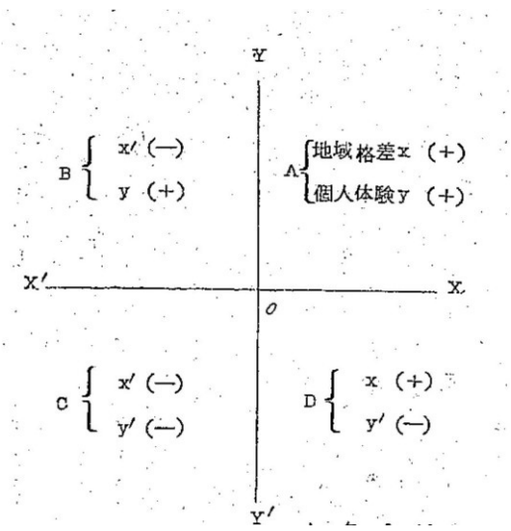

図２　１号、７頁

疎開体験の思想化にもっとも積極的であったのはゆりはじめであった[31]。ゆりは、『疎開派』における体験者各々の体験内容や認識のズレを抱えたまま世代論に乗り出し、このようなズレを包括できる理論の確立に着手する[32]。彼は、資料保存および発掘が容易な「集団疎開」に偏っている議論の克服を目指し、疎開の形態を「縁故疎開」「集団疎開」「疎開残留」と分類した。なお、〈疎開派〉世代全体に対する図式化が可能な座標を考案し、自らの戦争体験・疎開体験に無自覚である同世代の包摂を思想的に試みる。図 2 でその座標を示したが、X 軸を「地域格差」、Y 軸を「個人体験」としており、「地域的な格差によっての戦争体験の深浅を X 座標を以て、個人的な戦争の影響(例えば、親、兄弟などが戦争によって死ぬなど)を Y 軸をもってあらわし、あらゆる地域の当時の学童生徒を「疎開派」のなかにすくいあげることが出来ると云う ABCD の各座標を設定してみた」[33]。このような図式は、疎開体験を戦争体験として普遍化することでその思想化を志すゆりにとっては、練り出されねばならなかったものと言えよう。なぜなら、思想としての客観性・普遍性を獲得するためには、宮原のような残留の場合だけでなく、疎開を受け入れた側の同世代も包括できる

ような普遍的なフレイムが必要だからである。

ゆりが疎開体験を思想化するねらいは、「忘れることは罪である　鈍色のノートからⅡ」(4号、後に『疎開の思想』に「疎開派の国家体験」の題目で収録)から確認することができる。

> 「戦争」、私たちがその中で呼吸し、生き、のめり込み、傷つき、やがて音立てて過ぎ去っていったあのいくさの日々、幼い日の情念に様々の意匠を灼いて通りすぎていったそれ。(中略)だがしかしあの時代をただただ暗い過ぎ去るべき時間として葬り去る人々には私は無縁である。何故彼等は戦中を戦後民主主義的な不思議な手つきで解析するのに終始するのだろうか。歴史認識を拒否した実感主義はそれ自体一個の完結したマイナスを示す「思想」ではあるが、彼等が過去から未来へのパースペクティブな視野を持つ志向がない限り彼等には思想を語る資格がない[34]。

「戦後民主主義」に頼って「戦中」を「解析」する「思想」を斥けているのが読み取れよう。裏返せば、『疎開派』を通じて戦争体験としての疎開体験を思想化する営みは、「戦後民主主義」に頼って「戦中」を「解析」する「思想」ではないことを意味する。ここでゆりが「戦後民主主義」そのものを否定するのではない点を断っておく。ゆりの標的は、あくまでも「戦中」の挫折によって「戦後民主主義」を受け入れざるを得なかったという事実を無視して「戦後民主主義」的な視座から「戦中」を裁断することに、警鐘を鳴らしていると解釈すべきであろう。このような主張が可能な理由を、彼によって説明された〈疎開派〉の特性⑤少国民として抱いていた天皇・天皇制に対する強固な観念から見出すこともできよう。

〈疎開派〉ゆりは、戦争体験としての疎開体験を思想化するために、「戦中」に直結する戦争体験であるはずの疎開体験を、「戦後民主主義」のフィルタによって濾過してはいけないと考えていた。橋川文三は、「世代意識の形成は、断絶した歴史と自己との関り方を批判的に再構成しようとする意欲から生れ、そこに一種の歴史認識論といった内容を含んだことを推定するにむずかしくはない」[35]と述べている。ゆりの営みが橋川の説明する世代論に合致するかどうかに関してはさらなる考察が要求されよう。ただし、ゆりの「意欲」を橋川の言葉から再解釈すれば、「戦後民主主義」という障害によって「戦中」という歴史と「断絶」している「自己」の世代を正しく「批判的に再構成」しようとし、戦後を覆っている「戦後民主主義」によって装着された思考回路を当然視しせず、「戦後民主主義」の世の中に変貌する以前の「戦中」を直視するように呼びかけている、とも言えるのではなかろうか。

以上のような『疎開派』の思想の是非を判断することは、本稿の射程を超える至難な課題である。ただし、大江健三郎に対する批判で、「戦後民主主義」に対する上記のようなスタンスが、より具体的に提示されたと考えられる。このことに関しては、次節で述べることにし、『疎開派』における思想化の具体的な展開の様相に踏み込みたい。そのために、図2に対するゆりの説明に立ち戻る。

ゆりは、座標AD面対BC面と大きく分けて説明しているが、その基準を簡単に要約すれば、疎開に行った側すなわち都会=AD面対疎開を受け入れた側すなわち田舎＝BC面、となる。そこでA面とD面を比較して、A面が「体験の集中的・相乗的」な様相を呈するのに比べ、D面は「疎開に対するヴィジョンは相対的に拡散している」「疎開の日々の記憶は、流れてゆく時間の前に、日常の繁雑さの間に埋没してゆく」と述べている[36]。つまり、戦争体験としての疎開体験を有しながら、体験を思想化できる可能性の高いA面と、体験が「拡散」してしまい思想化できる可能性の低いB面、となろう。

座標 BC 面に「共通のものはともに疎開をマイナス(受け入れた」とし、B 面と C 面の「疎開派を分つ唯一の点は戦中に自らの問題として戦を形而上学的に受けとめていたかどうかにかかる」と規定している。先述した体験を思想化する可能性の濃度から B 面と C 面を分けていると言ってよい。ここで注目したいのは、C 面に対する具体的な説明が、大江健三郎「飼育」(1958)に対する批判を通じてなされている事実である。この点に関しては、次節で詳細に検討する。

以上、『疎開派』におけるゆりはじめの批評を中心に、『疎開派』における世代論を確認し、<疎開派>の世代論が文学と結びつけられた事実を確認した。戦争体験としての疎開体験を総体的な戦後思想として昇華させようとし、戦中期に少国民として抱いていた天皇・天皇制に対する強固な観念を、「戦後民主主義」によって事後的に批判する考えを排斥した。このような思想の具体的な適用例について、次節からは文学を中心に議論したい。

## 4.『疎開派』が走り出す②—「戦後派」に異議あり

本節では、ここまで論述した<疎開派>の世代論が、文学批評および文学創作を通じて適用される様相を検討する。先述したように、『疎開派』は疎開体験の思想化を達成するために世代論を全面に押し出し、文学を通じて世代論の形象化を試みた。『疎開派』には、<疎開派>同世代の石原慎太郎[37]と大江健三郎に対する批評が掲載されたが、ここでは大江の事例を中心に分析する。前節に引き続き、座標の C 面に属するとされた大江健三郎「飼育」に対する評語を確認したい。

> いくさに最も遠く、おそらくは極限までその意識を拡散させた地点で成り立っている小説に大江健三郎の「飼育」がある。戦のさ中にありながら、平和な光と寓話的風景に満ち、一切の人間の闘いへの意志を欠く地域社会、そこで少年たちは熟れた日の光を浴びてひたすら幼いセクスを見せあっては欠伸をするだけである。黒人兵が生きて彼らの村にやって来る。主人公は黒人兵が敵であるとする観念さえ抱くことがない。彼は黒人兵をまるで動物とみなして飼いはじめる。このインターナショナリズムに立った、云わば国籍不明の小説は、最終的場面で主人公に、行為全体を「遊び」とみなして離脱の姿勢を取らせるに及んで、作者大江健三郎が疎開派後期に生れ、決定的な第三現象(C 面、筆者)の四国松山に育ち、戦争による深い体験をも経ておらず、更にその戦いからシリアスに学ぶことなく、彼の育った擬制民主主義の眼球によってみごと女陰的オハナシを作りあげ、曲りくねった大仰な修辞をつらねることに成功したことを示している[38]。

「飼育」の小説世界を代弁するキーワードは「牧歌」である[39]。「飼育」における「牧歌」を論じた先行論は、大概「牧歌」性を文学的な達成点として評価している[40]。けれども、上記の引用文では、「飼育」における「牧歌」性を、「戦のさ中にありながら、平和な光と寓話的風景に満ち、一切の人間の闘いへの意志を欠く地域社会」であるがゆえのものと説明しており、そのトーンは皮肉に満ちていると言えよう。「インターナショナリズム」「国籍不明の小説」が書かれた理由を、「地域社会」の「四国松山に育ち」「戦争による深い体験をも経ておらず」「戦いからシリアスに学ぶこと」がなかったからだと、手厳しい批判の言葉をつらねているのが分かる。

「飼育」の「牧歌」性を批判しているゆりは、「死者の奢り」(1957)に対する評語で、<疎開派>であるはずの大江における戦争体験の「微妙」さを批判している[41]。ここでも、大江における戦争体験の「微妙」さは「大江が四国の山奥で戦争の少年期を送ったということに起因する」

と言っているように、引用文と同じく田舎という出自を問題視している。ここまでをまとめれば、田舎出身でありながら「戦中」の体験すなわち戦争体験を「形而上学的に受けとめて」いない大江は、3 節の座標に具現されているゆりの<疎開派>思想からすれば、疎開を受け入れた側でありながら戦争体験から何も学ぶことのなかった C の最も悪しき標本になる。

ゆりにとって、「飼育」の「牧歌」性は批判せねばならないものであった。もし大江が戦争体験を「形而上学的に受けとめて」いないのなら、それは都市に比べて空襲の危険度が低いため疎開する必要もなく、疎開を受け入れる程度の戦争を体験した「四国の山奥」「地域社会」の田舎で「戦中」を過ごしたことに理由がある、とゆりは考えたであろう。

ここで、「飼育」における空間設定を見てみよう。

> 波だち重なる山やまの向うの都市には、長い間持ちこたえられ伝説のように壮大でぎこちなくなった戦争が澱んだ空気を吐きだしていたのだ。しかし戦争は、僕らにとって、村の若者たちの不在、時どき郵便配達夫が届けて来る戦死の通知ということにすぎなかった。戦争は硬い表皮と厚い果肉に浸透しなかった。間近になって村の上空を通過し始めた≪敵≫の飛行機も僕らには珍しい鳥の一種にすぎないのだった[42]。

作中の舞台である「村」が「牧歌」的な空間になりうるのは、「都市」の「戦争」が「浸透」していないからである。「都市」ではないどこかの「村」が「戦争」と隔離されているのであれば、そこはゆりの言う「地域社会」つまり田舎に他ならない。「《敵》の飛行機」が空襲を象徴する限り、都市部の人口密集区域や産業地帯への打撃を目的とする空襲が「山奥の山村」を主要ターゲットとすることは、まずないだろう。都会に比べて日常的な空襲警報や灯火管制と程遠い生活が営為できる田舎だからこそ、「《敵》の飛行機」は「珍しい鳥」という認識にたやすく置換されるのである。

「飼育」の「牧歌」性を端的に象徴するのは、「僕ら」と「黒人兵」のカーニバル的な「古代めいた水浴」[43]の場面である。メルヘン的な祝祭が演出されるためには、そもそも「《敵》」であるはずの「黒人兵」が「家畜、天才的な動物」[44]に認識されねばならない。ゆりの引用文に戻れば、「主人公は黒人兵が敵であるとする観念」を抱いていないがゆえに「黒人兵をまるで動物とみなして飼いはじめる」、つまり殺さず生かす。大江に対するゆりの批判は、<疎開派>世代の少国民としての強固な観念にとらわれていなければならなかったはずの「僕ら」が、「《敵》」に対する敵愾心を失い、「《敵》」を殺さず生かしておく設定に向けられていたのだ。

ゆりは、「《敵》」に対するしかるべき少国民の生を、「山の光」(5 号の「ぼくたちの楽しみ」改稿)という小説をもって提示した。「山国の村に父母と離れて」疎開している子供たちは、ある日「一機の B29 爆撃機」が不時着陸する光景に遭遇する。好奇心をそそられた子供たちは、「爆撃機」の探索に出かけ、死にかけている搭乗員を目撃する。

> 「ここにいるこいつは敵なんだ。この男たちのために日本国民は毎日大勢殺されているのだぞ、そんなものに水など与える必要はないのだ」。続いて 0 が云う。
>
> 「おそれ多くも天皇陛下の御心を悩ませ申しあげているのもこの男たちではないか。それなのにお前はこの男を助けようとでも云うのか。もしそうならもう容赦はしないぞ」
>
> S はこの剣幕に押されてふいに鼻白んで沈黙してしまうのだった。
>
> 「そうよ、殺して頂戴。私の父はこの男たちに殺されたのよ。こんな変な男。殺してしまえばいいのよ」[45]

「飛行服をまとった、死にかけた男」が「敵」である論理、「敵」は「殺してしまえばいい」

という戦争の論理が優先する限り、「敵」を助けることはない。「敵」を殺すという戦争の論理は、「おそれ多くも天皇陛下の御心を悩ませ申しあげている」という言葉が象徴するような天皇・天皇制に対する強固な観念にささえられながら、「敵」に「父」を「殺された」経験によって培養され身につけられたのであろう。このような強固な観念は、<疎開派>世代の特徴として先述した通りである。

「飼育」と「山の光」は、敵軍の戦闘機搭乗員と遭遇した子供たちという設定を共有しながらも、相反する子供の思考と行動が描き出されている。「飼育」では「敵」が「家畜」となり、子供と一時的ではあるが関係が結ばれる様相が描かれている。これに反して「山の光」では、「敵」である事実が何よりも優先し、助けを求める「敵」を「放置」する行為を通じて殺そうとする様相が描かれている。このような差異をまとめれば、「敵」を生かすかあるいは「殺す」かに分かれよう。

宮原昭夫は、ゆりの提示した座標をもとに大江による世代主張に反論を展開し、大江は「遅れてきた青年」ではなく、「空間的に離れていた青年」だと論じている[46]。「空間的に離れていた」とする時、「離れている」状態を判断できる基準地点が存在せねばならないだろう。大江は、どこから「離れていた」のか。

「山の光」では、敵機の突然の出現に、村人は「突然に起った腹をゆさぶる轟音に度を失い不安げに囁きを交わしている」と書かれている。

> この静かな戦慄は村人たちの恐怖の深さを示しているのだろう。私たちはその様子が面白く、顔を合わせて哄笑し、申し合わせたように桶を運ぶために棒の端を摑んで歩きだした[47]。

敵機の出現に対して少年たちは、「村人」のように「不安」「恐怖」の念を一切抱かない。「敵」の存在を肉眼で確認するために探索に出かけるところと、突然目の前に出現した「敵」を見殺しにするところに、戦中の観念に支配されている少国民の有様が端的にあらわれていよう。「飼育」の空間設定は、「地域社会」すなわち田舎、ゆりの疎開思想に従えば疎開を受け入れた側に該当する。「山の光」の少年たちは、受け入れ側の「聞き取り難い方言」とは遮断され、「他国者の世界を作りながら生き続ける」[48]しかない。「山の光」が前景化するのは少年たちの世界であり、それは疎開に行った側すなわち都会に該当する。空襲や疎開を直接経験した都会側にとって、ただの敵機一機に「不安」「恐怖」を抱く田舎側の様子は「面白く」て「哄笑」の対象になる。少年たちは、疎開する以前の都会生活の中で、連日の防空訓練と実際の空襲経験を通じて戦争という状況に慣れているはずであろう。

大江健三郎「飼育」に対するゆりはじめの批判の根底には、都会と田舎における戦争体験の差異に対する都会側の優越性が潜んでいる。空襲によって肉親を喪う経験、疎開に参加する経験を総じて戦争体験とするならば、「飼育」の空間設定は、そのような戦争体験とは無縁な田舎となっている。「山の光」は、田舎の「村人」と都会の「少年」たちのコントラストを通じて、戦争体験を有する側の心理的な優位を描いた。「山の光」が「飼育」を意識して書かれたことには疑いの余地がないのだが、前節で確認したゆりの思考から考えれば、そこには戦争体験を有する都会人によって定位される戦争体験を有しない田舎の人々、という構図が設けられていると考えられる。要するに、戦争体験を有する疎開世代としての〈疎開派〉を立ち上げようとしているのであり、その場合、戦争体験を有しないか戦争体験に無自覚な同世代は、思想化の邪魔ものにされるのである。その代表は、他ならぬ大江健三郎であった。

以上、大江健三郎を意識した上で提出された『疎開派』における批評や創作を中心に、〈疎開

派〉における世代主張が、文学といかに結びつけられているのかについて検討した。「戦後派」大江健三郎を俎上に載せる形で展開する論法は、2 節で述べた「戦中派」を対照項とする論法と酷似している。戦争体験を有する「戦中派」対戦争体験を有しない「無戦派」という図式を踏襲する形で、戦争体験を有する〈疎開派〉対戦争体験を有しないあるいは戦争体験に無自覚である「戦後派」大江、という枠組みが設けられている。このような思考は、戦争体験を有することができた都会側対、戦争体験を有することができなかった(と都会側に映っていた)田舎側という、戦争体験をめぐるヒエラルキーを構築する結果になってしまった。

## ５．終わりに―〈疎開派〉は何処へ

本稿では、〈疎開派〉の世代主張が、戦争体験としての疎開体験を思想化しようとする試みをめぐって展開されたことを明らかにした。〈疎開派〉は、「戦中派」を対照項としつつ、「戦中派」における戦争体験たるものを、疎開体験から導き出した。〈疎開派〉の可視的な活動が展開された同人誌『疎開派』を通じて、戦争体験としての疎開体験を地域差・個人差を基準に図式化する座標が提出されるなど、疎開体験の思想化の具体像を確認することができた。そのような思想は、「戦後民主主義」になる以前の「戦中」を直視できるような視座の必要性を主張しており、それは、少国民世代でありながら自らを「戦後派」「戦後民主主義」者とする大江健三郎に対する批判につながる。〈疎開派〉は、「飼育」の「牧歌」性に象徴される戦争体験の希薄さを問題視している。「牧歌」性の原因を、都会に比べて戦争状況と隔離されているがゆえに戦争体験を有しないあるいは戦争体験に無自覚である「田舎」という空間設定から論及しようとする部分が確認された。そのような論調には、戦争体験の有無を軸に、都会が田舎より優位に立つ構造が見え隠れしている。

〈疎開派〉という世代主張は、本稿の冒頭で一例を提示したように、確かに一時期広がったようである。だが、2017 年現在から考えて、思想的普遍化にたどり着いたかどうかに関して言えば、筆者は悲観的である。橋川は、「歴史に対する自己の様式(スタイル)の主張」としてあらわれる「世代意識」は、一見「汎歴史主義に対する状況的な微分」として考えられるが、究極的には「すべての世代は直接普遍者に属」し、その意味で「世代とはかえって深く歴史の立場に通じる」と述べている[49]。日本における世代論が、橋川の論からうかがえるしかるべき世代論になっていない点に関しては、先述した通りである。無論、橋川の主張がすべて正しいとも言えないが、戦争体験の思想化という議論からすれば、橋川の論を軸に〈疎開派〉について考えをめぐらすのも、〈疎開派〉を評価する上での一つの物差しにはなり得よう。

〈疎開派〉は、「歴史に対する自己の様式」の主張に成功できたか。結論から言えば、「戦中派」「戦後派」無しでは成り立たない〈疎開派〉である限り、「自己の様式」の固有性が主張できたとは言いがたい。本稿で明らかにしたように、〈疎開派〉における世代主張の論理構造は、対立するかのように見受けられた「戦中派」と「戦後派」(大江健三郎)という対照項を召喚し、それらに反するものとしての〈疎開派〉を浮き彫りにする、となっている。「歴史に対する自己の様式」の主張を通じて「歴史認識」との通路が確保される世代論であるならば、「自己の様式」そのものが確立されていない限り、普遍的な「歴史認識」に基づいているか否かははかりようがなかろう。

ゆりはじめに代表される〈疎開派〉の主張は、そもそも論理的に包括せねばならない同世代の

大江健三郎を「空間的に離れていた」としてしまい、都会対田舎という二分法に無自覚であったがゆえに、日本全体を包摂できる思想の確立に到達できなかった。そうである限り、思想としての普遍性を担保する「歴史認識」とは、程遠かったとしか言いようがない。戦争体験論における歴史認識を阻害する世代論の問題点を、〈疎開派〉は露呈してしまったのではなかろうか[50]。

一方、観点を変え、〈疎開派〉の世代主張を文学研究の立場から拾えば、以下の課題が想定されよう。第一、本稿でもその一端に触れたが、大江健三郎や石原慎太郎が、同世代においていかに受容されたのかを探ることができる。第二、1970 年前後に疎開体験を文学的に形象化しながら登場した作家たち[51]が数多く存在した事実を考察するための手がかりを提供する。第三、第二と関連し、疎開体験を文学的題材としつつ〈疎開派〉の世代主張とは距離を取った作家たち、例えば高井有一や黒井千次を考察するにあたって、良い比較対照になる[52]。

自らの世代的固有性を主張するために立ち上がって走り出した〈疎開派〉は、途中で自らの固有性を内部から汲み取ることができず、つねに自らを何かと対照させる形で存在意義を主張しようとした。その結果、そもそも「戦中派」を論敵としたはずなのに、「最後の戦中派」[53]になってしまった。また、「戦後派」を論敵としつつ「戦後民主主義」に変貌した戦後を議論するかのようであって、実際は都会中心主義に陥ってしまった。鶴見俊輔が、「戦争体験を持たないことによって成立する戦後」に言及する理由は、もっぱら「戦争体験の意味づけ」に傾倒することの危険性に対する自覚があったからかも知れない。〈疎開派〉は、「戦争体験の意味づけ」のみに傾倒する思想の行方をほのめかしている。それは、戦争体験を中核とする過去の意味づけに支えられる「悔恨共同体のゆらぎ」[54]が生じる 1970 年前後の思想的知見を、はからずも予見してしまったとも言えよう。黒井千次や高井有一の描いた疎開体験は、このような時代性を踏まえた上で解析せねばならないと思われる[55]。この点と関連する考察は、今後の課題としたい。

## 注

(1) 久野収ほか『戦後日本の思想』(初刊 1959)、岩波書店、1995、263〜266 頁。
(2) 橋川文三「「戦争体験」論の意味」(初出 1959)、『橋川文三著作集 5』、筑摩書房、1985、231〜233 頁。
(3) 前掲「「戦争体験」論の意味」、236〜241 頁。
(4) 橋川文三「歴史と世代」(初出 1960)、『橋川文三著作集 4』、筑摩書房、1985、253〜256 頁。
(5) 橋川文三「戦後世代の精神構造」、前掲『橋川文三著作集 4』、282〜287 頁。
(6) 大江健三郎「戦後世代のイメージ」(初出 1959)、『厳粛な綱渡り』、講談社、1991、54〜58 頁。
(7) 前掲「戦後世代のイメージ」、40〜45 頁。
(8) 福間良明『「戦争体験」の戦後史』、中央公論新社、2009、8〜9 頁。他に、福間による「「戦争」をめぐる言説変容--体験論とメディアの力学」(『戦争社会学の構想　--制度・体験・メディア』、勉誠出版、2013、173〜196 頁)も参照。
(9) 丸山真男「近代日本の知識人」(初出 1977)、『丸山真男集　第十巻』、岩波書店、1996、254〜256 頁。
(10)成田龍一『「戦後」はいかに語られるか』、河出書房新社、2016、55〜65 頁。
(11)福間も成田も「戦後派」「少国民世代」の者に大江健三郎をあげている。なお、「戦中派」の論客に橋川文三を引用する点も一致する。ちなみに、福間は、「戦後派世代」の後の世代として終戦後に生まれた世代を「無戦派世代」と区分している。
(12) 『毎日グラフ』記事は、横浜市教育委員会・横浜市の学童疎開五十周年を記念する会編『横

浜市の学童疎開--それは子どもたちのたたかいであった』、横浜市教育委員会、1996、528 頁から参照。
(13) 竹内好「戦争体験論雑感」(初出 1960)、『日本とアジア』、筑摩書房、1993、238～242 頁。
(14) ゆりはじめ「「疎開派」の原体験　鈍色のノートから」(初出『疎開派』1 号)、『思想の科学』1963・8、62 頁。
(15) 注 14 と同じ。
(16) 前掲「「戦後派の原体験」、64～66 頁。
(17) 宮原昭夫「「疎開派」の戦後体験」(初出『疎開派』1 号)、『思想の科学』1963・8、67 頁。
(18) 前掲「「疎開派」の戦後体験」、68 頁。
(19) 柴田道子「戦争が生んだ子どもたち」、『思想の科学』1959・8、19～24 頁。柴田は、自らの疎開体験に基づく児童文学『谷間の底から』(東都書房、1959)をもって戦争体験としての疎開体験の文学的形象化を行った。順序としては、『谷間の底から』を含めて柴田に関する考察が先行されるべきであろう。柴田に関する論稿は今後の課題としたい。
(20) 柴田道子「人生における少女期」(初出 1970)、『ひとすじの光』、朝日新聞社、1976、143～146 頁。
(21) 鶴見和子ほか編『ひき裂かれて--母の戦争体験』、筑摩書房、1959、146～161 頁。橋川文三は、本書において学童疎開という戦争体験がカテゴライズされたことを、戦争体験論における功績としている(橋川文三「家の戦争体験」(初出 1959)、前掲『橋川文三著作集５』、254～259 頁)。また佐藤泉による、本書の戦後史・戦後思想史の脈略に基づく解説がある(岩崎稔ほか編『戦後思想の名著 50』、平凡社、2006、198～207 頁)。
(22) 月光原小学校編『学童疎開の記録』、未来社、1960、431 頁。
(23) 浜館菊雄『浮雲教室　学童集団疎開の記録』、黒潮社、1956、7 頁。
(24) 前掲「人生における少女期」、20 頁。
(25) 不定期発行であったが、把握された発行年月を記すれば以下の通りである。1 号:1963・1、2 号:1963・6、3 号:1963・12、4 号:1964・8、5 号:不明、6 号:1965・9、7 号:1966・3、8 号:1967・3、9 号:1968・5、10 号:1970・2、11 号:1971・4。以下、『疎開派』からの引用は筆者・記事名・号数・頁のみ記入。
(26) ゆりはじめ『戦争を知らない大人たちへ』、マルジュ社、1997、66～67 頁。
(27) ゆりはじめ「「疎開派」のことなど」(初出 1970)、『あしたの雪』、虔十社、1989、333～338 頁。
(28) 「疎開派を提唱する」、1 号、2 頁。前掲「「疎開派のことなど」の 335 頁によれば、作成者は宮原である。
(29) 前掲「疎開派を提唱する」、3 頁。
(30) 柳瀬広「疎開派の底辺から」、1 号、15 頁。
(31) ゆりによる疎開体験の思想化の成果に『疎開の思想　銃後の小さな魂は何を見たか』(潮出版社、1972)および増補版『疎開の思想　里で聞いたは何の声』(マルジュ社、1994)をあげることができる。
(32) ゆりはこのような体験内容と認識の差が、むしろ「疎開の理論的な解明」に役に立ったと述べている。前掲『戦争を知らない大人たちへ』、66 頁。
(33) ゆりはじめ「「疎開派」の原体験」、1 号、6～7 頁。
(34) ゆりはじめ「忘れることは罪であるから　鈍色のノートからⅡ」、4 号、26 頁。
(35) 橋川文三「世代論の背景」(初出 1958)、前掲『橋川文三著作集 4』、266 頁。
(36) 前掲「忘れることは罪であるから」、36～37 頁。
(37) 石原慎太郎に対する批評に、宮原昭夫「石原慎太郎小論--疎開派頂点の陰画」、3 号、28～34 頁。
(38) 前掲「忘れることは罪であるから」、38～39 頁。
(39) 「牧歌」をめぐる研究史は、村上克尚「言葉を奪われた動物--大江健三郎「飼育」をめぐる江藤・三島の批評の問題点」『日本文学』2010・6、34～35 頁を参照。
(40) 例えば「牧歌的少年時代をフィックション化することによって作中の少年のみずみずしい

感受性と作者の感受性が」「合致し」、「神話的な性格を帯びた不思議な世界をつくりだしている」のに「成功」したとする評が典型的であろう。篠原茂『大江健三郎文学事典』、スタジオ VIC 、1998、33 頁。
(41) ゆりはじめ『戦後文学あるばむ』、おうふう、1996、219 頁。
(42) 大江健三郎「飼育」、『大江健三郎小説 1』、新潮社、1996、65 頁。
(43) 前掲「飼育」、87 頁。
(44) 前掲「飼育」、86 頁。
(45) ゆりはじめ「山の光」、『修身「優」』、マルジュ社、1996、130 頁。
(46) 宮原昭夫「第三現象の男・早く来すぎた青年--大江健三郎小論」、2 号、11 頁。
(47) 前掲「山の光」、112 頁。
(48) 前掲「山の光」、108 頁。
(49) 前掲「「戦争体験」論の意味」、238～241 頁。
(50) 山田宗睦は「疎開世代」という世代主張は、「歴史尺度としては擬似世代にすぎない」としている(山田宗睦「比較世代論のための覚え書」、『思想の科学』1964・8、59 頁)。本稿では詳しく論じないが、山田は「疎開派になると、加害者意識はないわけよ。被害者意識のほうが強くなってくる」と言い、〈疎開派〉世代主張における加害者意識の欠如も突きつけている(鶴見俊輔・山田宗睦・安田武「(座談会)同時代に生きる--「私」の中の昭和 60 年」、『以悲留』1986・4 号、31 頁)。
(51) 縁故疎開体験を小説化した柏原兵三は、「私の戦争体験の一番大きな部分を占めるものは疎開であった」と述べている。柏原兵三「疎開派の『長い道』」、『潮』1970・9、189 頁。
(52) このような問題意識に基づいた論稿に、拙稿「「不確かな私」」のために召喚される母の死--高井有一「北の河」論」、『名古屋大学国語国文学』2016・11、29～44 頁をご参照いただきたい。
(53) 前掲『戦争を知らない大人たちへ』、67 頁。
(54) 成田は、「悔恨共同体のゆらぎ」が生じる時点を「六八年」に据えた上で、1990 年代半ばまでの思想的動向を「悔恨共同体」との関係から論じている。前掲『「戦後」はいかに語られるか』、66～79 頁。
(55) 前田愛は、1970 年前後黒井千次など「内向の世代」が登場したことを、「悔恨共同体の崩壊」を意味する文学的な出来事としてとらえている。また、このような「内向の世代」が台頭する思想的背景を 1968 年の「全共闘運動」の昂揚から見出している(前田愛「一九七〇年の文学状況--古井由吉「円陣を組む女たち」をめぐって」(初出 1986)、『文学テクスト入門』、筑摩書房、1993、頁 213～232)。ただし、前田の論において高井有一は言及されていないが、現在の研究状況からすれば、高井を「内向の世代」的な特質を共有する作家の一人として数えても差し支えなかろう。ちなみに、注 51 の柏原兵三も 1970 年前後において「内向の世代」とされていた。

※ 引用に際して、旧字は新字に、旧仮名遣いは現代仮名遣いに適宜改めた。ルビ・傍点・強調などはすべて省略した。